九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

P.リンズィの「インダストリィ」概念について : スコットランド啓蒙形成期における「経済改良」提言の一つの論理

関, 源太郎

https://doi.org/10.15017/4486574

出版情報：經濟學研究. 53 (1/2), pp.159-176, 1987-07-10. 九州大学経済学会
バージョン：
権利関係：

P.リンズィの「インダストリィ」概念について

——スコットランド啓蒙形成期における「経済改良」提言の一つの論理——

関　　源太郎

目　　次

I．はじめに
II．「インダストリィ」と人間存在
III．「インダストリィ」の諸機能
IV．「インダストリィ」の展開諸条件
V．一応のまとめ

I．はじめに

パトリック・リンズィ (Patrick Lindsay, 1686-1753) の主著と目される『スコットランド国益考』[1] を中心にして，彼の経済改良の提言の基礎に据えられた論理内容を吟味してみたい。リンズィは，それ自体としては，これまであまり論じられたことがなかったように思われる。わが国について言えば，管見の範囲では，その状況は次のとうりである。先ず，小林昇教授がJ.ステュアートの『経済学原理』の背景の一環として「スコットランドにおける農業革命の思潮」の展開史を問題にされた際，『スコットランド国益考』の出版の事実に言及しておられる[2]。また北政巳教授が，18世紀スコットランドにおけるリネン工業発展史の研究のなかでやはり『スコットランド国益考』に触れられて，リンズィは「その中で『亜麻織物工業の発展が国富の増大につながる』と示唆した」と結論を取り出し紹介しておられる[3]。確かにリンズィは『スコットランド国益考』の著者として知られてはいるが，本格的な研究対象として取り上げられては来なかった。あるいは，それには値しない

1) Anon., *The interest of Scotland consider'd, with regard to its police in imploying of the poor, its agriculture, its trade, its manufactures, and fisheries.* Edinburgh, 1733.
他にリンズィの著書とされているものに，Anon., *Reasons for encouraging the linnen manufacture of Scotland, and other parts of Great-Britain. Humbly submitted to Parliament.* By the author of *The interest of Scotland consider'd, &c.,* London, 1735.がある。また，Anon., *An untimely birth, called Answers to the Queries*...Edinbugh, 1737. もリンズィの著作とされている (Cf. J. Kennedy, W. A. Smith and A. F. Johnson, *Dictionary of Anonymous and Pseudonymous English Literature,* new and enlarged edition, Edinburgh and London, 1932, 6th vol., p. 152)。
The interest of Scotland consider'd, を『スコットランド国益考』と訳出するのは問題がないわけではない。というのは，周知のように，1707年の合邦 (the Union of Parliaments) によって既にスコットランドはイングランドとともに「大ブリテゥン連合王国」を憲政のうえで形成しており，またリンズィ自身,「…ブリテゥンは,…全く一つの国民国家 (one Nation) であると言われるのは今では正しいといってよいと，私は申し上げる」(*Reasons for encouraging the linnen manufacture of Scotland,* p. 11) と述べているからである。しかしながら，リンズィの論旨はブリテゥンの枠組みを歴史的な前提としつつそれを通じてスコットランドに独自な経済改良を打ち出すことにあると思われるので（後述），敢えてこのように訳出する。

2) 小林昇「『原理』の歴史的背景——ジェイムズ・ステュアートと農業革命——」,『小林昇経済学史著作集』V，J.ステュアート研究　未来社，1977年，90頁。

3) 北政巳『近代スコットランド社会経済史研究』同文舘，1985年，63頁。

のかも知れない。海外に目を転じてみると，次のような評価が彼の故国スコットランドにおいてなされている。「三人目のパトリック・リンズィはそれ程の資産家ではなかった。そして彼のものと信じられている著作,『スコットランド国益考』は手の込んだ (sophisticated) 論文ではあるが，本書を執筆するように鼓舞したものがあったとすれば，おそらくそれは，一製造業振興管財人 (a Trustee for Manufacture) としての彼の経験のみであって，トレイドについての何らかの偉大な経験ではなかったであろう。管財人評議会においてスコットランドのトレイドを代表する彼の——エジンバラの家具商人であった彼の保証書は，非常に大きな意味を持っていたわけではない」[4]。

このJ.ショーの記述は，みられるとうり，簡単な短評であり，またその前後の文章も，リンズィと同じく商人出身の管財人たちについての手短な紹介なので，ショーの真意を突きとめるのはそれ程容易なことではないが，ともかくも，ショーはリンズィについて三つのことを述べている。一つは，彼がそんなに「資産家」ではなかったこと，二つには,「管財人評議会」[5] のなかでの彼の位置はそれ程大きくはなかったということである。これらの点ではあまり高い評価を与えているとは言えない。そして第三に，我々にとってはうえの二つのことよりも興味深いのであるが，それは『スコットランド国益考』執筆のリンズィの動機・目的である。ショーによれば，その動機は「一管財人としての彼の経験」であり，したがってまた，その目的は，いわば，同評議会の活動の正当化と宣伝にあり，その意味では,『スコットランド国益考』をその本質的な面で貫いている議論は,「トレイド」すなわちスコットランドの国民経済全体についてのそれというよりもむしろ「一管財人」として見られた「管財人評議会」の活動についてのそれであることになる。

確かに，リンズィの執筆動機に対するショーの洞察は,『スコットランド国益考』の「序文」

4) John Stuart Shaw, *The Management of Scottish Society 1707-1764. Power, Nobles, Lawyers, Edinburgh Agents and English Influences,* Edinburgh, 1983, p. 75.

5) 「管財人評議会」(Board of Trustees for Fisheries and Manufactures) 設立の一端は1707年の合邦に遡る。同評議会の基金のもとになったのは，合邦に際してスコットランドがより多額のイングランドの公債を共に背負うことになった補償として与えられた the Equivalent であったからである——他にモルト税（1724年創設）の余剰金なども付け加えられたが。もともと the Equivalent は，粗毛織物製造業や漁業の振興のために用いられるように定められていたが（合邦条約第15条，cf. *The Treaty of Union of Scotland and England 1707*, ed., with an introduction by George S. Pryde, London, 1950, p. 94)，1726年にロイヤル・バラ会議がこの基金を政府から「独立した団体によって自分たちの便宜のために」使うことを請願した。こうして1727年に「管財人評議会」はスコットランドの産業振興・育成を目的とした「半官団体」として設立された。「評議会」のしたには，リネン，毛織物，漁業の三つのサブ委員会がすぐさま設置されたが，設立当初から管財人に任命されたリンズィはリネン委員会に席をおき，終生，管財人をつとめた。「管財人評議会」の活動は，リネン産業に関していえば，生産技術的なものと金融的なものに及んだが，具体的には「捺印監査官」による品質の管理・監督，紡糸学校の設立，優秀な原料・半製品・完成品の生産に対する報奨金の授与，外国，とくにオランダからの先進的な技術の導入とその普及，および，様々な設備投資にたいする助成金の付与等々があげられる。

なお，「管財人評議会」の設立経緯，構成，活動内容とその歴史的評価などについては，R. H. Campbell ed., *State of the Anual Progress of the Linen Manufacture 1727-1754. From the Records of the Board of Trustees for Manufactures etc. in Scotland preserved in the Scottish Record Office,* Edinburgh, 1964. に付されたキャンブルによる「序論」，H. Hamilton, *An Economic History of Scotland in the Eighteenth Century*, Oxford, 1963, esp. pp. 131-159, A. J. Durie, *The Scottish Linen Industry in the Eighteenth Century*, Edinburgh, 1979. および，J. S. Shaw, *op. cit.*, pp. 58-77 & 124-143. を参照。

にも窺われるとうり[6]，正鵠を射ているように思われる。また行論で明らかになるようにリンズィは，当時「管財人評議会」が様々な諸手段を用いて育成・振興を図ろうとしていたリネン産業を機軸としたスコットランドの発展を提唱しているのである。しかしながら，我々が問題にしたいのは，まさにそのような動機に衝き動かされそうした目的を果たそうとする際にリンズィが開示する概念構成や論理展開である。つまり，「近代的」経済社会における生産力の展開を把握するためのリンズィの概念構成や論理展開である。ショーはこの点を「手の込んだ」と評したのであろう。では，どのような意味でそれは「手の込んだ」構成や展開をとっているのであろうか。また，その具体的内容は何であろうか。本稿では，このことを吟味し，併せてリンズィの歴史的意義を探究してみたい。

さらに以上のような課題を遂行するにあたって念頭に置いておきたいことがある。それは，このリンズィの時代がスコットランド啓蒙の「初期の世代」[7]のそれと重なるということである。言い換えれば，その形成期にあたるということである。スコットランド啓蒙の形成期の進行動向と，その重要な中心地であったエジンバラで主として活躍したリンズィの論述とは無関係であったのだろうか。スコットランド啓蒙を疑いもなく代表する「年下の」世代の，いわゆる主要人物たちの思想内容とリンズィの経済改良の提言のための論理内容とは，どのように関連しまた関連しないのであろうか。こうした疑問が湧いてくる。すなわち，スコットランド啓蒙の歴史的背景の一つ，ないし，その一環としてリンズィを取り上げる視座のことである[8]。しかしながら，本稿ではこのより大きな課題に直接に応えることはできない。むしろ，本稿はこうした問題意識を秘めたそのための準備作業であることを予めお断りしておきたい。

6) リンズィは『スコットランド国益考』の執筆動機をその「序文」のなかで次のように叙述している。「全ての諸階層の人たちが，わが製造業が公共社会の配慮と関心の対象になって以来〔「管財人評議会」の設立以来〕，…わが製造業の状態と進歩についてとくに識りたいと正直に好奇心を現わにしている。…／多数の人たちが，この問題に関して何か公刊されないかと長い間期待してきたし，今も望んでいる。だから著者〔リンズィ〕は，これまでこの類のものが何も出版されなかったと知って，この仕事を成し遂げるのに自分が適していないことを正しく分別しているにもかかわらず，（自分の私的な事柄に必要な手間暇が許すだけの）時間を割いて，自分が非常によく精通しているこの主題について自分が観察してきたことを書き著そうと最近決心した。もっとも，これは，こういうことについてもっと優秀な技術やもっと多くの知識をもっている他の人たちがもっと優れた目的でこれと同種類のなにかを公刊するように駆り立てられることを狙っているのだが」(*The interest of Scotland consider'd*, preface, pp. xviii-xx.〔　〕内は引用者，（　）内は引用文。以下，同様)。直接的な表現を避けているだけに余計にリンズィの本音が見透かされうるであろう。

7) スコットランド啓蒙の「初期の世代」と「年下の」世代との区別は，N. フィリプスンに依る。Cf. N. Philipson, "Culture and Society in the 18th Century Province; The Case of Edinburgh and the Scottish Enlightenment." in: *The University in Society*, Vol. II, Europe, Scotland, and the United States from the 16th to the 20th Century, ed. by L. Stone, Princeton, 1975.

8) 「〔経済〕改良の動きは，たとえそれが成功しなかったとしても，スコットランド啓蒙の全盛期以前に樹立されていた。スコットランド啓蒙はこの趨勢に影響を及ぼしたが，しかしそれを創始したわけではなかった。それどころか実は，スコットランドに新しい形態の経済事業を導入しようとする試みは，おそらく，スコットランド啓蒙それ自体の起源の一つであったであろう。少なくとも言えることは，経済改良を達成しようと奮闘しているうちにスコットランドは，スコットランド啓蒙の主要人物のうちの幾人かが知的偉業の達成に必要と認めた方向に移動していたのである」(R. H. Campbell, "The Enlightenment and the Economy," in: *The Origins and Nature of Scottish Enlightenment*, edited by R. H. Campbell and A. S. Skinner, Edinburgh, 1982, p. 23)。味わうべき，示唆に富む洞察である。

II.「インダストリィ」と人間存在

「怠惰 (Idleness) は人間本性を苦しめるほとんど全ての不幸の源泉である。すなわち，それは貧困と欠乏の生みの親であり，また，これら〔貧困と欠乏〕はかならず恨み・不平および不満を生み出す。そしてこれらは，しだいに民衆の間での喧騒と騒乱にまで熟成し，また，怠惰な大衆を，社会の平和を乱すのに適した手軽な道具として党派の意のままに準備し，その気にさせて，一国民を悲惨と零落に巻き込むのである。かの社会を破滅させる原因であり野心の主要な源泉である高慢 (Pride) それ自体でさえ，また全ての略奪，殺人，圧政，他の荒廃した陰鬱な光景――これらは野心に発する外国人による征服あるいは国内戦争を伴うが――は，怠惰によって育まれ，培われる。怠惰は悪徳 (Vice) に満ちており，悪徳の不可避的で確実な諸結果である災難と悲惨をもたらす。怠惰が支配するところは何処でも，人口が希薄であり，人民は惨めである」[1]。

リンズィは『スコットランド国益考』の本文をこのように書き始めている。「怠惰」は人間社会の諸悪の根源である。それは直接には，なるほどその個人の経済問題に関係することではあるが，そこに端を発する害毒の波紋は社会的・政治的・人間的，つまり「人間本性」にかかわる全領域にまで広がっていき，やがて，その社会と国民全体を滅亡へと導いてしまうことになる。ここには，当時のスコットランドの社会経済的状況とそれに対応する一般的思潮とが反映されていることは言う迄もないが[2]，このように重大な危機意識をもって捉えられた「怠惰」につき，リンズィはこう続ける。「要するに，富と人口数，つまり一国民の主たる力と幸福がインダストリィによって増加されるのと同様に，人口の減少，および，一国民を軽蔑に値するようにさせる一切のものは，怠惰から派生すると言ってよい」[3] と。「怠惰」は「インダストリィ」に対比され，「インダストリィ」と反対の機能を持つものと規定される。すなわちリンズィは，この「インダストリィ」によってスコットランドの現状の打開を図ろうとしているのである。しかし，では一体，そうした重大な役割を負わされた「インダストリィ」とは何であろうか。

「本来 (naturally) 人間は活動的で休息することはないのであって，だから，彼が役に立つように雇用されない場合には，彼自身あるいは他

1) *The interest of Scotland consider'd*, pp. 1-2.

2) グラントによれば，「〔1707年の〕合邦から18世紀の半ばまでは不況の時期であった」(I. F. Grant, *The Economic History of Scotland*, Reprinted ed., Westport, 1979, p. 203)。また，レンマンは，「合邦後のスコットランドにおける誤った行政と不況の憂鬱な歴史が何時終わったかを正確に決定するのは容易ではない」と断った上で，「相対的な繁栄へ向けての一定の方向性」の開始をあえて求めるとすれば「1727年がどれにも劣らず良い」と述べている (B. Lenman, *An Economic History of Modern Scotland 1660-1976*, London, 1977, pp. 66. 強調は引用者)。この年に，言う迄もなく「管財人評議会」が設立され，Royal Bank of Scotland が創設された。

また，cf. R. Mitchison, *Lordship to Patronage Scotland 1603-1745,* London, 1983, p. 169.

1707年の合邦の推進者の一人であったサー・J・クラークは，1730年に著した手稿 "Sir John Clerk's Observations on the Present Circumstances of Scotland", ed. by T. C. Smout in: *Micellany of Scottish History Society X*, 4th series, vol. 2, Edinbugh, 1965, pp. 183-212. において，合邦以降，期待した程にはスコットランドが経済発展を成し遂げていないことに不満を漏らしている。とはいえ，合邦それ自体が否定的に評価されているわけではなく，むしろその最大の原因は，彼によれば，スコットランド人の努力不足にある。だからこそ彼は，同朋の一層の奮起を促しているのである。

また，cf. T. C. Smout, *A History of Scottish People 1560-1830*, Fontana/Collins, 1972, pp. 226-7.

3) *The interest of Scotland consider'd*, p. 2.

人に対して危害や災難を加えないようにしているのは稀なことである」[4]。人間はそもそも「活動的」存在であって，絶えずなにものかに働きかけることによって人間たりうるというのが，リンズィによる人間一般の規定である。とすれば，このような人間の活動的存在の機能が正しい方向に発揮されねばならない。つまり，「よく働くこと (to be industrious) は，我々の利益であるばかりでなく不可欠の義務でもある」[5] というわけである。これに対して，「怠惰」は「インダストリィ」の否定であり，人間性の否定でもある。このように「インダストリィ」は人間存在との不可分の関係において捉えられ，それはさしあたり，人間の活動機能＝「労働」と概念されている。そして，このことはリンズィによって，次のように二つの観点から敷衍されていく。第一に，「自然は我々に〔生活のための〕材料をふんだんに用意しているとはいえ，しかし，それらを我々が使用するのに相応しくするためには我々自身のインダストリィと労働が必要である」[6]。人間は，他の動物とは違って自然界に存在する諸素材をそのままでは自己の生活に役立てることはできない。それらを加工して使用可能な状態に転換しなければならない。そのためにこそ，人間は「インダストリィ」を発揮し，労働しなければならないと言うのである。したがって，この規定は，人間存在の自然的・肉体的特質と彼を取り巻く自然環境との関係に着目したものであって，人間の生命保持という意味では，根源的ではあるが，それだけに，いわば消極的な，あるいは外的なものといえよう。それにたいし，第二の規定はこう叙述されている。

「ある人が自分のインダストリィによって，生活に不可欠な必需品，すなわち食料，衣類，および住居をふんだんに自給してしまうと，彼はその場で休むことなく，奢侈，すなわち富の破壊へと進み，新しい欲求を創り出し発明する。この諸欲求は非常に現実的 (real) なので[7]，それらは我々をさらなるインダストリィへと駆り立て，掻き立てる。だから，インダストリィが無ければ，生活は心地好いものではなくなり，一つの重荷になってしまう」[8]。先にリンズィは「活動的」存在としての人間を摘り出していたが，ここでは，そのことが人間の「諸欲求」の展開と結び付けられて捉え返されている。人間はいったん生命の保持という最低条件を確保できるようになると，今度はその保持をどういう形で行うのかという問題，つまり，生活の質の問題に自ら突き当たる。創造された「新しい諸欲求」が新たなる「インダストリィ」へと人間を衝き動かすのである。第一の規定を始源・前提としての規定ではあるが，それだけに積極的で動的な内容をもち，「活動的」存在というリンズィの人間把握の特徴がより一層盛り込まれた規定といえよう。何故ならば，この「新しい諸欲求」は，第一の規定のように，生命の保持というような限界をもたず，たとえ，いったん充足されたとしても，また新たに生まれ，飽くことがないからである。「富 (Riches) の追求をい

4) *Ibid.*
5) *Ibid.*
6) *Ibid.*

7) この「現実的」という語句には，「これらの諸欲求の半分は非現実的であり想像上のものである」(*The interest of Scotland consider'd*, p. 62) と捉える「哲学者」に対するリンズィの批判がこめられている。彼は，「諸欲求」の「現実性」・実現可能性は，「全世界に開かれた」「貿易と商業」によって保証されているとみる。このことの意味について，後に改めて取り上げる。
8) *The interest of Scotland consider'd*, pp. 62-3. 傍点は原文でのイタリック。以下同様。

ちばん熱望している人々は，稀にしかあるいは決してそうはできないのだけれども，しかし，彼らが生きている限りこの同じ終わりのない追跡を続けていく」[9]。「インダストリィ」と「新しい諸欲求」との相互連関・動的過程は，決して収束することのない永久のプロセスとして，人間存在のなかに内在化され刻み込まれていると，リンズィは把握しているのである。

それと共に，先に述べたように第一の規定が直接に人間存在の肉体的・生理的な側面に関連するとすれば，この第二の規定は人間存在の社会性の問題と深い関係をもつ。というのは，この「新しい諸欲求」は人間の営む社会生活の産物でもあるからである。リンズイは言う。「これらの物〔様々の奢侈品〕，および，いちいち挙げる必要はないが，それ以上の物は，それら自体としては〔生存に〕不必要であり，それらが無くても楽に生活して行けるかも知れない。しかし，どの物についても，我々の嗜好を形づくる習慣と慣習とがそれらの物を断然必要なものにするので，誰もが，自分の能力，地位あるいは生活状態および生活様式に応じてそれらの物を使うのである」[10]。リンズィにとって，人間が社会を形成する動物であることは自明のことである[11]。この社会生活が人間を動物から区別し，人間らしい生活を保証するのである。社会に生きる人間は，それゆえに，対自然関係のみならず対人間関係をも営む。そこからその社会の「習慣と慣習」が生まれ来て，それらに拘束されつつ人間はその社会に生きる。したがって，リンズィにあっては，個人の行動を規定する重要な要因としてその社会の「習慣と慣習」が重視され，また，彼の政策提言の基調にも据えられることにもなるが，それはともかく，この社会の「習慣と慣習」が，人間の単なる生存を越えた生活を促迫する人間の嗜好・「新しい諸欲求」を規定するというのが，リンズィの見解であり，したがってまた，この「新しい諸欲求」に促されて駆動しはじめる「インダストリィ」も，人間の営む社会生活にその起源を持つことになる。

こうしてリンズィは，当時のスコットランドの窮状を先ず承認し，これを打開していくための手段として「インダストリィ」を措定したが，「インダストリィ」そのものは，彼によれば，人間の人間としての存在に，換言すれば，「人間本性」に深く根ざしているのである。とはいえ，「インダストリィ」はそのままで直接に現実化したり，発現したりするわけではない。現実はむしろそれとは反対の状況を呈しているではないかというのが，リンズィの現状認識である。とすれば，「人間本性」に内在化されているはずの「インダストリィ」を顕在化し，これを全面開花させる諸条件は何か――このことが，当然彼にとり切実な課題となってくるであろう。実際に，『スコットランド国益考』のなかで彼はこの問題に全力をあげて取り組んでいる。しかし，このことを取り上げる前に，スコットランドの窮状を打破する任務を担うとされる「インダストリィ」は，具体的には，どのような諸機能を発揮してこのことを達成していくと，リンズィは構想しているのか，いま少し詳細に跡づけてみよう。

9) *The interest of Scotland consider'd*, p. 63.
10) *The interest of Scotland consider'd*, p. 64.
11) リンズィは，*Reasons for encouraging the linnen manufacture of Scotland*. の冒頭を「社会は，…人類が互に行う普遍的で必然的な依存，…法に…基づく」(p. 5) と書き出している。人間による社会形成の事実が，彼の場合には，前提であり出発点でもある。

III.「インダストリィ」の諸機能

前節で明らかにしたように，リンズィは「インダストリィ」を人間存在と絡めて把握し，これが人間に固有の活動＝「労働」であることを鮮明にしたが，そのうえで彼は，「インダストリィ」の近代社会における諸機能を取り上げ，それがもつ重要性を具体的に明るみに出そうとする。まず当然のことながら，「インダストリィは，国富の…主要な源泉である」[1] と宣せられる。ここで，言う迄もなく，リンズィは「インダストリィ」の経済的機能について言及しようとしているのだが，既に知ったように，「怠惰」が「貧困と欠乏」および「国民の零落」の一大原因であるとすれば，その対極に位置づけられる「インダストリィ」がこのように捉えられるのは自然であろう。しかし，ここで留意したいのは，「国富」という語句が示すように，「インダストリィ」がナショナルなレヴェル・視点で捕捉されていることである。このことの意味は，いったい何であろうか。

リンズィによれば，人間を「インダストリィ」へと駆り立てるのは，先に見たように，人間の肉体的・生理的存在であり，加えて，人間の社会生活のなかで絶えず創造される「新しい諸欲求」であった。しかし，こうした「人類の欲求は無数といえるほど多様である。最も器用な人でも，彼自身の熟練 (Skill) とインダストリィによって，生活を我慢できる位に快適にしておくのに必要とされる便益品の半分も自給することはできない」[2]。人間が，こうして，「インダストリィ」を発揮し労働をしたとしても，それが孤立的に行われるならば，その場合には生産力が低いしまた一面的でもあるので，「多様」で「新しい諸欲求」には十分に対応できず，真に人間らしい生活は保証されえない。このようにリンズィは主張する。では，この限界はいかにして突破されるのであろうか。

「…我々の相互援助 (our mutual Assistance) によって，生活を快適で心地好くするのに相応しい何物でもふんだんに供給される。しかし，社会のこの偉大な至福を受ける資格のある者は，誰もがその至福のために労働しなければならないし，その重荷につき自己の分を分担することができなければならない」[3]。リンズィの意味するところはおよそ次のとうりであろう。「相互援助」とは，封建社会の解体後ますます史的に展開しつつあった商品流通と，これを支える社会的分業の展開のことである。これらの発展こそが潤沢な消費財の供給・「快適な生活」を保証している。つまり，「国富」の源泉として把握された「インダストリィ」は，単なる抽象的な人間活動＝「労働」であるばかりでなく，むしろそれは，具体的に社会的分業の一環を形成し商品経済の展開を推進する労働でもある。そして，またこの限りにおいて，「インダストリィ」は「国富」の源泉としての役割を果たすことができる。そのうえで，このことが根拠となって，個々の「インダストリィ」の担い手は「相互援助」の豊かな果実・「社会の偉大な至福」を享受することができる，と。要するに，商品経済社会の下での生産力の上昇・生産物の多様化によって孤立的な「労働」＝孤立した「インダストリィ」の限界は打破され，真に人間らしい生活が確保されるというのである。したがって，そのために

1) *The interest of Scotland consider'd*, p. 61.
2) *The interest of Scotland consider'd*, p. 67.
3) *Ibid.*

も，個々の「労働」=「インダストリィ」は，こうした社会的分業の一環を成す分業労働に仕上げられなければならないという要請も，打ち出されて来ることにもなるが，リンズィは「相互援助」の展開を単に一国規模のものとは考えない。すなわち，先に掲げた引用文に続けて彼はこう述べる。「我々のインダストリィは我々の幸福に先行する。何故ならば，他のどの国の農産物 (Product) または製造品でも，それを我々が享受できるためには，その前に我々は，無くても済ませることができ他国の人々によって尊重される我々自身の何物かを保有していなければならないし，そして，その何物かを我々は彼ら自身の余分な物と交換に彼らに与えなければならないからである」[4]。この一節から，「我々の幸福」・「快適な生活」・豊かで人間らしい消費生活をリンズィは，世界的規模でもって展開する商品経済社会のなかで構想していることが，十分に判明してくるであろう。それ故にまた，「相互援助」の網もただ単に一国内に限定された商品流通や社会的分業ではなく，世界的に進展する国際的な商品流通と国際分業を含意していると言うことができるであろう[5]。

「国富」とその源泉である「インダストリィ」とは，国際的な商品流通・国際的市場での競争戦において通用し，これに勝ち抜くものでなければならない。「インダストリィ」の生産物は，まさに「他国の人々によって尊重される我々自身」の余剰生産物であることによって初めて，「国富」たりうるというわけである。こうしたリンズィの問題関心が彼に「インダストリィ」の経済的機能をナショナルな観点から取り上げさせることになっているように思われる。周知のように，その当時のヨーロッパの列強諸国は，商品経済社会・資本主義社会の形成期，資本の原始的蓄積の時代にあって，その発展の原動力を外国貿易に求め，重商主義的な諸政策を採用し相互に競い合い，敵対し合っていた。この歴史展開の現実とリンズィの思考とは，こうして，結び付いているのである[6]。

このリンズィの認識は他の点においても透徹している。富国強兵政策を採った重商主義国家は，そのためにも膨大な軍事力と官僚制とを持たざるをえなかった。当然，これらを賄うために莫大な国家財政が必要となったが，リンズィは，「彼ら〔「労働に慣れていて自分の労働によって快適に生活する人々」——すなわち，「インダストリィ」の担い手たち〕は，ある定まった支配者によって全ての人々の能力に比例して課され徴収される社会の租税〔の支払い〕に，喜んで従う」[7] と述べ，この莫大な国家財政を支える重要な一翼を「インダストリィ」の担い手たちのうちに見出している。

そもそもリンズィによれば，彼らは「充ち足りた，平和愛好的で，物事を進んで行なう臣民，そして従順で良き臣民であり，遵法精神に富み，自由を執拗に護り，決して奴隷状態になりえない」と，特徴づけられるのである[8]。こうしたリンズィの事実認識が，うえに述べたような彼の判断を導出させているとも思われるが，それにしても，「インダストリィ」の担い手たちのこのような諸属性は何に由来するのであろうか。こ

4) *Ibid.*
5) リンズィは，特にスコットランドとイングランドと間の——リネンと毛織物との分業を重視している (Cf. *The interest of Scotland consider'd*, pp. 111-6)。
6) こうした観点はリンズィに，東インド会社の活動の積極的な是認さえ行わせることになる (Cf. *The interest of Scotland consider'd*, pp. 72-3)。
7) *The interest of Scotland consider'd*, p. 6.
8) *The interest of Scotland consider'd*, p. 5.

れらの諸特徴・諸属性を裏付けるリンズイの論理展開の内容は如何なるものであろうか。

彼ら——「インダストリイ」の担い手たちと対比して「怠惰」な人々について，リンズィはこう記す。「怠惰な臣民は貧しい。だから，他人の費用で，すなわち，卑しく奴隷のように〔他人に寄食して〕従属するか，あるいは，盗人，強盗または乞食になるか，その何れかによって扶養されざるをえない」[9]。「インダストリィ」の否定である「怠惰」が他人への寄食・「従属」を伴なわざるをえないという彼の把握に注目したい。「怠惰」であるが故に，「財産を持たない人々は，卑しい従属によって生活しなければならないし」，この「卑しい従属」のために「彼ら自身は，自由を全く享受できず，自由についてもこれっぽちも知ることがない」。したがってまた，「他人の自由を護ることも出来ないし，またそうしようともしないであろう」という結論も導き出されることにもなる[10]。他方，「インダストリィ」の担い手たちは，「卑しい，つまり奴隷のように従属しないでも，それ〔自分たちの労働〕によって自分たちの糧を手に入れる方途を知っている」[11]。彼らは，すなわち，独立した自由な存在である。その根拠に「インダストリィ」があり，「インダストリィ」がまたこれをより一層推進していく。明らかに「インダストリィ」は，リンズィにあっては，古代の奴隷制社会や中世の封建社会での隷属的な労働とは截然と区別された近代的な労働を意味しており，それが持つ近代性・自由で独立な性格が強調されている[12]。それゆえに，「彼らは，社会の平和が危うくなったり，彼らの共通の安全が外国からの戦争によって脅かされると，彼らの自由に関する高価な諸特権を防衛し，彼ら自身とその子孫のために彼らの労働の果実——これを侵害した者は，自由な政府の下では，かならず処罰される——を確保しようとして，喜んで彼らの生命を危険に曝す」ことさえ行なう，とリンズィは主張する[13]。彼らこそ，歴史的に展開しつつあった市民的自由の社会関係の担い手・推進者に他ならない。その場合，彼らがその資格者たりうるのは，彼らが自らの「インダストリィ」によって独立した自由な存在・自律的な自己の存在を獲得しこれを保持することができているからである。そうして，この市民的自由の社会関係が暴力・武力によって蹂躙されるならば，彼らはそれを守護するために武器を取って立ち上がると，リンズィは展望するのである。

ともかくも，リンズィによれば，「勤勉と正直とは，一般的に言って，手を携えて歩むのである。このことは，怠惰が，たいていの場合に，詐欺と不正直とを伴うのと同様である」[14]。「インダストリィ」と商品経済社会の展開は，市民

9) *The interest of Scotland consider'd*, p. 6.

10) 以上，*The interest of Scotland consider'd*, p. 8.

11) *The interest of Scotland consider'd*, p. 6.

12) リンズィは次のような所見を述べている。「ある商品の売り手が，それがたとえ役に立たない玩具であっても，貨幣を求めて買い手に依存するのは，買い手がその財貨を求めて彼に依存するのと同様である。だから，ビジネスを行っていくうえで何百，何千の顧客を持っているはずの商人，製造業者，あるいは職人は，得意先という点でその顧客全員におおいに恩恵を受けている（これは非常に確かなことなのだが）と，考えてもよいが，しかし，彼は顧客たちのうちの誰かに奴隷のように従属している訳ではない。何故ならば，全ての商業において買い手と売り手の間の恩恵は相互的であるから」*(Reasons for encouraging the linnen manufacture of Scotland*, pp. 7-8)

13) *The interest of Scotland consider'd*, p. 6. 「インダストリィ」の担い手たちは戦時にのみ勇敢な兵士＝民兵であるばかりでなく，一旦，戦いが終結したらすぐに武器を捨て，自分の平和時の本来の仕事＝「インダストリィ」に帰還するという意味でも良き兵士なのである。それにたいし，「怠惰な貧民」はむしろ戦争の継続・騒乱を好む。以上，cf. *The interest of Scotland consider'd*, pp.6-7.

14) *The interest of Scotland consider'd*, p. 10.

的な諸徳性を培いそして養う。今度は，こうして身に付けられた市民的な諸徳性が,「インダストリィ」と商品経済社会をより一層前進させていくための条件となり，そのようなものとして作用する。このようにリンズィは，経済活動と人間的諸徳性との関連を問題にし,その際に「インダストリィ」の持つ機能を高調するのである。

これまでに見てきたようにリンズィは,「インダストリィ」の担い手たちは，当時，重商主義的な国家の枠組みのなかで伸長しつつあった近代市民社会を支持し，これを押し進め，発展させていく諸機能を様々な側面で発揮し現実化していくと説明する。こうしてリンズィにとっては,「インダストリィ」の十全なる展開の保障と促進とが，果たされるべき焦眉の課題となってくる。だが，そのためには,「インダストリィ」を十分に発揮させるための諸条件が解明されなければならないであろう。節を改めて，この点をリンズィに傾聴することにしたい。

Ⅳ.「インダストリィ」の展開諸条件

「インダストリィ」は古代奴隷制社会や中世封建社会での隷属的な労働ではなく，近代的な「自由な」労働なので，まず，それに相応しい政治•政府を必要とする。「臣民の財産が，専制的な君主やより専制的な彼の官吏と家来たちの暴力的で詐欺的な捕捉，あるいは，他の不公正な捕捉に陥りやすいところでは，生活が必然的に要求するものに応える以上に労働しようとする者は殆んどいないであろう。…しかし，臣民たちの財産が，国家の行政官の権力を確証し調整するのと同一の法によって確保されている自由な諸国では，人間は労働するように鼓舞される。何故ならば，彼らは自分たちの労働の果実の享受を絶対的に保障されているからである」[1]。「インダストリィ」が盛んになるためには，「インダストリィ」の成果の保護，換言すれば，私有財産制度がきちんと整備されていなければならない。そのことをリンズィは,「専制的な」諸国＝封建社会と「自由な諸国」＝近代市民社会とを対照させて，このように描き出した。ここで特に問題とされているのは，権力者・支配者層による私有財産制度のルールの無視である。そして，この弊害を克服する手段は，近代市民社会にあっては,「法」であるべきだと述べられている。すなわちリンズィによれば，近代市民社会の「法」は，支配者・権力者の統治権力を社会的に認知し，これを正統化するが，それと同時に，その統治権力そのものを制限し，これを一定の枠内に閉じ込め封じ込める。「法」による社会の一切の支配――これこそが近代市民社会のルールである。

こうした枠組みのなかで,「勤勉な貧民」＝「インダストリィ」の担い手たちが，このルールを遵守する精神を彼らの経済活動・商品経済への関与によって獲得し，内面化しているのは，前節で既にみたとうりである。他方でまた「怠惰な貧民」も，自らの「インダストリィ」によって自分たちの生計をたてることがないので，私有財産制度を侵犯する可能性をおおいに持つことになる。「このより下層の人々は，（もし彼らが怠惰であれば）盗人，乞食，あるいは，奴隷のような従属によって生活をたてることになる。…疑いもなく，盗人，乞食は，厳格に執行される立派な法と治安の諸規則 (Rules of Police) により押さえつけられてもよかろう」[2] という主張も，この点から打ち出されてくるのである。

1) *The interest of Scotland consider'd*, pp. 4-5.
2) *The interest of Scotland consider'd*, p. 17.

こうして，上層の権力者・支配者たちと下層の「怠惰な貧民」とからくり出され振るわれることになる暴力による侵害から「インダストリィの果実」を擁護し，「インダストリィの動因」を保障する法的・一般的条件である近代的な所有権・私有財産制度を確立し，そして，こうした諸制度・ルールを適切に管理・運営していくための近代的な政府・政治が，まずリンズィによって強く唱道されるのである[3]。

しかしながら，リンズィによれば近代的な政府・政治の課題は上述のことに尽くされているわけではない。リンズィはこう記している。「ロー氏 (Mr. Law) は貨幣とトレイドに関する彼の論文のなかで，つぎのように述べている。『いかなる国民の物ぐさ，怠惰および詐欺的な常套手段 (fraudulent Practices) といえども，それらは，何らかの生まれながらの邪悪 (natural Depravity)，いいかえれば，ある国民，ある国に特有の悪い性癖によるのではなく，欠陥を持った行政 (a faulty Administration) に伴なう物愚さ，怠惰および不公平によって獲得される悪い諸習慣によるのである。だから，マキャヴェリィ (Machiavel ——ママ) が『良き法のみが，そして厳格に執行されたこの良き法のみが人間を正しいものにするのである』と述べているのは，正しいように思われる」[4]。

リンズィがローとマキャヴェリィの文言を引用しながら何を主張しようとしているかは明白であろう。すなわち，それは，「法」によって「怠惰な貧民」を「勤勉な貧民」に，「怠惰」を「インダストリィ」へと転化させるべきだということである。「近代的」な政府は，私有財産制度の確立・管理運営といった一般的な任務を遂行するのみならず，さらに立ち入って，未だ広範囲に亘って残存する「怠惰な貧民」を「勤勉な貧民」へと造り変え，転換させなければならない。その際にリンズィがこうした転換のための一つの契機として重視するのが，社会の「習慣」である。既に見たように，彼は人間の行動を規定する要因の一つとして社会の「習慣と慣習」を摘出していたが，ここでも，その観点から問題に接近している。「怠惰な貧民」が「怠惰」なのは，彼らがそのような「悪い習慣」に染っているからであり，したがってその限りでは，この「悪い習慣」を矯正すればよいというのが，リンズィの見解である[5]。それ故に，例えばリンズィは，「辺境で，住民の少ない」ハイランドや北西諸島における「キリスト教知識宣伝協会」(the Society for the Propagation of Christian Knowledge) の活動が，そこでの住民たちの宗教上の教化に多大な貢献を果たしてきている事実を容認しつつも，さらに進んで次のように述べる。「…しかし，もしこの〔上記の〕基金のマネージャーたちが，これらの諸地方のジェントルマンたちと協力して，彼ら〔ジェントルマンたち〕の間に何んらかの種類の仕事 (Work) を導入し，そしてそこの人々たちに労働すること (to labour) を教えるならば，彼らは，間もなくプロテスタンティズムの信者になるのみならず実践的なキリスト教徒にもなるであろう。何故

3) この点に関するスコットランドの現状については，リンズィは極めて楽観的な認識をもっている。Cf. *The interest of Scotland consider'd*, p. 16.

4) *The interest of Scotland consider'd*, p. 84.

5) リンズィは述べる。「確実に悲惨と欠乏がやってくるという分別や理解が，財産を持っている人たちを説き伏せて，倹約に励みよく働くように (to be frugal and indusrious) させないとすれば，財産の本質と一致したどんな法律も無理に彼らにそうさせることはできない」(*The interest of Scotland consider'd*, p. 17)。「インダストリィ」を既に担っている人々の場合には，いわば，市場の論理が「分別」・「理解」という形で主体化され「習慣・慣習化」していると，リンズィは捉えているのである。

ならば，その時に彼らは，物を正直に供給する方法と，盗みをしたりあるいはいかなる他人にも負担を掛けることなく自分自身の手で労働する方法とを教えられているからである」[6] と。前節で吟味したようにリンズィの洞察によれば，「インダストリィ」に基づく経済活動それ自身がそれと結び付くべき様々な市民的徳性や「習慣」をその経済主体に内面化させ，また，逆に後者が前者をより一層展開させていくという関係が存在するのだが，ここでは，このような，言ってみれば，一つの循環運動を拡大する作用を外から担うものとして近代的な「行政」・政府は位置づけられているのである[7]。

以上述べてきたような「インダストリィ」の展開に相応しい政治・政府・「行政」の確立を前提としたうえで，リンズィはその経済的条件へと関心を移動し，彼の議論をさらに深めていく。

「これらのインダストリィへの動因が存続する間は，インダストリィを続行するためのファンドは決して失われることはないであろう。高価な生活の安楽品と便益品とは，富が増加するにつれてかならず増加することであろうし，それらは勤勉な貧民を雇用する堅実な手段であるだろう。つまり，貧者は富者の手から糧を手に入れ，富者の富は，同時に，貧者の労働によって増大される。したがって富と人口数とは，インダストリィという唯一の媒介物によって相互に存続し合い，互いに増加し合うのである」[8]。近代的な所有制度が確立されると，ともかくも，これに支持されて「インダストリィ」が十分に働きはじめ，機能しだす。その機能は二重である。すなわち，富の創造と増加，ならびに，人口・労働者の維持と増大がこれである。この両者は相互媒介的に進展していくが，その際に，それらを連結しこの過程の進行を牽引していくのが，まさに「インダストリィ」である。このように議論を展開するリンズィの意図が，国民経済・富の再生産の拡張にたいして「インダストリィ」が持つ意義を改めて際立たせることにあるのは，言うまでもないであろう。とはいえ，「インダストリィ」がこのような重大な役割を成し遂げるためにも「インダストリィを続行するためのファンド」・「勤勉な貧者を雇用する堅実な手段」が不可欠であると，併せて述べられていることに注意を喚起したい。こうしたリンズィの論理展開に含蓄されている意味について今すこし探ってみよう。

うえの一文においてリンズィは，「インダストリィ」の「ファンド」・「堅実な手段」の出自についても言及している。それによれば，富者による「高価な生活の安楽品と便益品」への需要・消費需要がこれである。他に「製造業は，それにたいする需要に比例して自己を拡大するだろう」[9] という記述も見受けられる。だとすれば，ここでリンズィは，富の再生産・「インダストリィ」の運動において「需要」（＝消費需要）が果たす役割についての彼なりの認識を呈示していることにもなるだろう。すなわち，「インダストリィ」が発揮され，それによって，富者の消費対象である「高価な生活の安楽品と便益品」を含めて富の生産が増大する。すると，このことが富者の購買・「奢侈」をいっそう刺激し，これを増大させることになるが，そうなると，今

6) *The interest of Scotland consider'd*, pp. 31-2.

7) その際にリンズィは，従来のような「怠惰な貧民」を法律で処罰するだけのやり方の限界を指摘し，彼らに労働の技術と習慣とを身に付けさせることの必要性を強調しそのための政策提言を行っている。Cf. *The interest of Scotland consider'd*, pp. 18-36.

8) *The interest of Scotland consider'd*, p. 5.

9) *Reasons for encouraging the linnen manufacture of Scotland*, p. 15.

度はこれに呼応して，拡大された規模での「インダストリィ」・より多数の「勤勉な貧者」が増大した富者の「奢侈」を満たすべく働きはじめ活発化される。こうして富の生産はよりいっそう増大するというわけである。「インダストリィ」の展開条件として富者による消費需要・「奢侈」の果たす機能が，かくして，リンズィによって強調されることになる[10]。

しかしながら，他方でリンズィは「奢侈」の機能のもう一方の側面，すなわちマイナスの面をも取り出し，これに注意を喚起する。「…奢侈が尊重されているところでは，全ての人類に広く行き渡っている情念である虚栄心が，全ての階層および生活状態の人々の間に奢侈を撒き散らすであろう。普通の財力を持つ人々は，自分たちの上級の人々と同じ程度に良く評価されようとして，嗜好や選択からではなく虚栄心から自分たちの経済状態を上回る生活をするであろう。／この途轍もない誤りに陥りやすい人たちは，彼らの処方を大いに取り違え，彼らの目的を達成することはない。すなわち，彼らの虚栄心が役立つのは，ただ彼らを軽蔑と嘲笑の対象にすることだけであり，彼らは尊重ではなく侮蔑と妬みを刈り取るのである。…しかしながら，この虚栄心は本性上の罪過 (an Error of Complexion) であり，生来の弱点である。すなわち，落ち度 (a Fault) というよりもむしろ欠点 (an Infirmity) であって，貧困と節倹が軽蔑され，人間が，その人の富と支出の故に高く評価される限り，この虚栄心は矯正されることはありえないのである。にもかかわらず，それは最も有害な邪悪である。すなわち，それは中流の生活状態にある多くの人々をビジネスの世界から放逐する，彼らは社会にとって最も有用で有益であるのに。そしてそれは，彼らの資産が過度の財産家たちによって独占される時，財産の均衡を破壊するのである」[11]。

リンズィによると，「虚栄心」は人間に内在化されている「本性」である。しかも，社会にとって「最も有害な」本性である。というのは，「普通の財力を持つ人々」・「中流の生活状態」にある人々は，「ビジネス」界にあって「インダストリィ」を担う重要な経済主体であるはずなのに，この「虚栄心」に促迫されて，つまり，上流階級の人々と同じように評価されようとして，自分に似つかわしい生活の程度を越えて「奢侈」に狂奔することになり，やがては「ビジネス」界から脱落してしまうからである。彼らの「奢侈」も成る程，富者の「奢侈」と同様に新たな「インダストリィ」のための「ファンド」を提供することになるかも知れないが，しかしリンズィはそのようには捉えない。近代経済社会における彼らに固有の任務はそこにはなく，「インダストリィ」を直接に担いこれを推進することにこそあるというのが，近代市民社会の経済過程を理解するうえでのリンズィの論理構成だからである[12]。ともかくも，こうして「虚栄心」

10) このことは，*Reasons for encouraging the linnen manufacture of Scotland*. においては，以下のようにより明確に定式化されている。「感覚的な欲望の充足，娯楽や気晴らしのための諸施設，および，便宜ということについての空想的で誤った見方。要するに，奢侈，虚栄心，移り気，あるいは，気紛れなどが指し示すものは，それが何であれ，全てのビジネスの非常に多くのファンドであって，このファンドは，才があって勤勉でよく勤労に精をだす貧者 (the ingenious, deligent, and industrious poor) を，富者の費用において，だが，富者に卑しく従属することなく雇用するのである」(p. 7)。

11) *The interest of Scotland consider'd*, pp. 65-6.

12) リンズィは言う。「万一，奢侈を富者に限定することができるならば，それは一つの偉大な国民的善であり，人類にとって社会的利益であるだろう。すなわち，もし支出の限度を越えるのが大所領主のみならば，多く持ち過ぎている者たちの富を削減するこ

は，彼らにこの重大な任務を放擲させてしまうことになる。しかし，その際に注意すべきは，この「虚栄心」の作用をリンズィはそれ自体としては潜在的なものだと理解している点である。言い換えれば，「虚栄心」を覚醒し機能させるものがそこに介在して初めて，この作用の過程は顕在化し現実化するのである。それこそ，とりもなおさず「奢侈が尊重される」ような社会の「習慣と慣習」の形成に他ならない，とリンズィは見る。リンズィが，人間は社会的存在であり，人間の営む社会生活と，そこから生まれてくる社会の「習慣と慣習」に拘束されて生活して行かざるを得ないと明確に把握していることについては，これまでに指摘しておいたが，こうした視点が強く打ち出されているのがここでも看てとれる。確かに，富者による「奢侈」の増大は「インダストリィを続行するためのファンド」・「勤勉な貧者を雇用する堅実な手段」の増加をもたらし，こうして「インダストリィ」の展開を鼓舞することにはなるが，と同時に，この傾向が助長され，「奢侈」が社会に一般化し習慣化して定着するようになると，そこに生きる「インダストリィ」の担い手たちの間にもこれが浸透してきて，彼らの内に潜む「虚栄心」を呼び起こし彼らの本来の役割である「インダストリィ」と「節倹」とを破壊してしまうことになる。かくして「国力の弱体化，国民の貧困と苦難」が到来することになるので，リンズィは，「貧困は奢侈にきびすを接して遣って来るものである」[13] と警告を発せざるをえない。

以上の説明からも判るように，リンズィは「勤勉な貧者」の雇用ファンドを富者の消費需要・「奢侈」に期待することに決して積極的ではない。事実，彼はこのファンドの出所を余所に探求している。

『スコットランド国益考』の「序文」の冒頭にすでにリンズィは次のような文章を掲げていた。「我々の貧困および我々のトレイドの衰退，我が祖国の人民を雇用し扶養するためのビジネスの不足から生じる人口の減少について，正当な不平がたくさん述べられて来た。こういうことを次のことに帰着させるのは正しい。つまり，衣服，家具等々について外国の製造品を〔我々が〕大いに使用していて，そのことによって，諸外国の貧民たちは，その全部というわけではないが，我々の費用において雇用されているということ，これである。我々が輸出する製造品は，我々が持ち込む製造品と，価値のうえで，均衡していない。それ故に我々は，我々の粗生産物 (our Product) を送り出して富者のために衣類を購買しなければならないし，他方，貧者は国内に留まって餓死するか，さもなければ，彼らの糧を求めて，労働とインダストリィに

とによって，それは財産の平衡を保つのに大いに貢献するであろう」(*The interest of Scotland consider'd*, pp. 63-4)。しかしリンズィは，「奢侈」を法的に規制すべきではないと主張する。「奢侈は倹約令や支出を制限することによって防止することもできる。しかし，このやり方は商業国の利益にまさしく反する。というのも，このやり方はインダストリィを消沈させ，製造業の進歩を妨げ，トレイドの増加と公私双方の富の増進を途絶するからである。これに対する唯一の救済策は，個々人の自然な賢明さと思慮分別に依るしかなく，それは，個々人の利得と所得により支出を規制すること，つまり，神が彼らを置き給うたかの生活領域に自分たち自身とその生活の仕方を限定すること，そして，倹約につとめ勤労に励み，この世での自分たちの運命と状態に満足することである」(*The interest of Scotland consider'd*, pp.66-7)。と同時に，ここには，「インダストリィ」の担い手の在るべき倫理が呈示されている。したがってリンズィにあっては，「怠惰な貧民」を別にすれば，つまり，彼の在るべき社会像においては，主体は「富者」と「勤勉な貧者」とに二分され，各々は相異なる倫理観・生活態度を持つべきことになるし，それ故，第 I 節にみた「インダストリィ」を駆動するはずの「諸欲求」も，「勤勉な貧者」の場合には，その実現に一定の枠が塡められることになるのであろうか。

13) *The interest of Scotland consider'd* , p. 65.

よって糧が得られる外国へ移住しなければならない」[14]。

見られるとうりリンズィは，スコットランドが直面している経済的な苦境の原因を端的に指摘している。それによると，スコットランドが「費用」を払って諸外国の「貧民」を雇用していることが，その原因である。すなわち，スコットランドでは富者が衣類等の「諸外国の製造品」＝完成品を愛用することによって，結果的に，自己の「費用において」こうした製造品＝完成品の製造工程において雇用されている諸外国の「勤勉な貧者」を扶養し，諸外国の「インダストリィ」を支えることになってしまっているというのが，リンズィの判断である。そうなると，スコットランドは貿易収支の赤字を埋め合わせるために粗生産物＝原料・食料品を輸出せざるをえなくなり，このことがまた，スコットランドの製造業に悪影響を及ぼし，一方で富者たちの消費をよりいっそう諸外国の製造品＝完成品に依存させることになり，他方で「貧者」は餓死するかあるいは国外へ移民せざるをえなくなる。こうして，スコットランドの窮状は加速されてしまっている。これがリンズィの見解であろう。

前節で明らかにしたように，リンズィの「インダストリィ」はすぐれて国際的な規模で繰り広げられている商品経済社会と関連づけて概念されている。国際市場において優秀な競争力を持つ「インダストリィ」こそが，他国の「農産物と製造品」の獲得を可能にし，それによって人間の「多様な欲求」を充足し，快適で豊かな人間らしい消費生活を保証する。このようにリンズィは捉えていた。だが，この種の「インダストリィ」の働きはこれに留まらない。それは同時に，海外市場を積極的に開拓することにより，自国の「勤勉な貧者」の雇用を確保し拡大することにもなるのである。こうしてリンズィは，「インダストリィ」の雇用ファンドの出自として富者の消費需要＝「奢侈」と並んで海外での需要＝輸出を摘出するのである。いやむしろ，リンズィにあっては輸出こそが重視されている。「この国民的害悪を癒す唯一の方策は，社会的な配慮と適切な奨励によって，一般に使用される，つまり，国内での消費は勿論のこと外国の諸地域でも販売されうるような何らかの製造品を販売用に製造し仕上げる知識と熟練を完璧にすることである。この主権者による改善策を実行に移す英知を有している諸国民は，そうすることによって大きな多数の諸利益を収穫してきたのである。そこの人民たちは増加し，その余分な人手は全て外国人の費用において維持されている」[15] とリンズィは明確に述べている。この一節は国家による産業振興政策の重要性を謳歌したものであるが，その論理を支えているのが輸出による「インダストリィ」の奨励・振興であることは明白であろう。

かくしてリンズィによって，外国貿易という見地から「インダストリィ」は再度捉え返されることになる。彼によると，同じ「インダストリィ」とはいえ，外国貿易に適するものとそうではないものとがある。即ち，外国貿易に適するための要件が問題になる。第一に，それは「普遍的に使用される」もの，つまり外国人により需要されるものでなければならない。次いで，輸送のために「嵩ばりすぎず」，また「外国市場での価格が当てにならず，不確かすぎてはなら

14) *The interest of Scotland consider'd*, preface, pp. i-ii.

15) *Reasons for encouraging the linnen manufacture of Scotland*, pp. 8-9

ない」[16]。食料品 (Provisions) や農産物・粗生産物 (Product) は，第一の条件を満たす場合もあるかも知れないが，この第二の点では不適切である，とリンズィは考える[17]。さらに，彼は述べる。「どの貿易立国も，その人手の最大数を雇用しているある特定のビジネス部門を持っている。それはステイプル商品と呼ばれる。これは，製造業向けの，その国に特有なある特定の粗生産物 (Product) に部分的には依存するが，しかしそれ以上に，購買者の目を楽しませるべく，〔同じ〕種類のうちで最も品質のよい財貨を製造し最も有益にその財貨を仕上げるためのその国の熟練と器用さ，および，その仕事を手早く仕上げる際のその国の勤勉さと精励さに依存する。すなわちこのことが出来ている国は，すべて，貿易のうえでライヴァルになる可能性をもつ他の諸国民よりも廉価で外国市場においてその財貨を販売できる諸国なのである」[18]。つまり，第三に，それは，「ステイプル」産業でなければならないということである。しかも，この産業は外国市場において相当の価格競争力を持っていなければならない。

ところで，うえに挙げた三つの諸要件は単なる並列的なものではないであろう。第一の要件は第二，第三の要件の基礎になり，第二の要件は第三の要件の前提となっている。したがってリンズィにあっては，第一と第二の要件とは第三の要件に包摂されそのなかで生かされることになってくるし，また，第三の要件こそが重視されてくるのである。この視点から問題を捉え返すとき，スコットランドの「ステイプル商品」はリネンを置いて他にないというのが，リンズィの意見である[19]。「リネンは我々のステイプルであるが，しかし，それは痛ましいほどに無視されてきた。しかしながら我々は，この産業に関しては，国王 *Henry* IV. の治世のフランス人や革命の時期のアイアランド人ほどには悪い状況にはない。(彼らの場合には，公共の奨励の力によって長足に進歩したにもかかわらず，そう言えるのである。)我々はそれを始めようとしているのではない。我々は，それをただ改善し拡大することを望んでいるだけである。／リネン製造業は，羊毛製造業を除けば，目下ブリテゥンで行われている如何なる他のビジネスよりも，価値の点で，大きくなる可能性を持っている。すなわち，それは，羊毛製造業と殆んどおなじ位に多数の人手を雇用する可能性を持っている。だから，〔ブリテゥン〕北部のリネン業は，〔ブリテゥン〕南部の羊毛業と同じように，〔ブリテゥン〕国民一般にとって非常に重要なのであ

16) *Reasons for encouraging the linnen manufacture of Scotland*, p. 9.

17) Cf. *Ibid.*, & *The interest of Scotland consider'd*, p. 68. とはいえ，リンズィは農業を無視しているのではない。「どの国でも最初にそして主に払うべき配慮は土地の改良に対してであるべきである。土地がより沢山，より立派に耕作されればされる程，それだけ沢山土地は生産する。そして，食糧が最も豊富な場合には，そこの製造業は最も有利に続行されるし，また，されうる。というのは，全ての賃金は生活必需品の価格に比例するに違いないからである」(*The interest of Scotland consider'd*, p. 36)。リンズィにとっては，農業は工業のために生かされて意味を持つのである。したがって，余剰の粗生産物の輸出は否定されていない (Cf. *The interest of Scotland consider'd*, p. 68.)。

18) *The interest of Scotland consider'd*, p.76.

19) 「こうして，どの職業もどの業種も (every Profession, and Trade)，(リネンを除いて) 量的に過剰だし，過剰に非常になりやすいのは明白である。しかしリネン業は，もし充分に改良されるならば，全ての我々の余分な人手を雇用するのに十分であるし，決して過剰になるはずがない」。「リネンは，君主から最も身分の低い臣民にいたるまで一般に使用されている商品であり，リネンが用いられる諸用途にほとんどうまく合致している他の何物によっても取って替わられることがありえない商品である」(以上，*The interest of Scotland consider'd*, pp. 127-8)。うえの諸条件に関連してリネン産業をリンズィはこのように特色づける。

る。つまり，それは，〔羊毛業と〕同様に公共社会からおなじ配慮，援助，そして，奨励を受けるに値するのである」[20]。このようなリンズィの主張が，彼もその一翼を担っていた「漁業及び製造業振興管財人評議会」を正当化し，その活動を宣伝することになるのは明白であろう。第Ⅰ節ですでに紹介したJ.ショーの評価を裏付けることになるかもしれない。しかし，ともかくもリンズィは，これまでに見てきたような論理でもって彼の生きたスコットランドの経済社会を捕捉し，また，その論理のなかから，スコットランドの現状打開の方策を提言し，その進むべき道を呈示しようとしたのである。

Ⅴ．一応のまとめ

これまで述べてきたような議論の内容と構成でもってリンズィは，当時のスコットランド経済社会のあるべき姿を展望している。それは，また同時に，「管財人評議会」の存在を意味づけることにもなっていた。というのは，彼の展望を切り開く重要な槓杆は「管財人評議会」のリネン産業を奨励する積極的な活動にほかならないからである。そのために，リンズィは同評議会の「基金」のより一層の充実，「基金」の充当法の変更さえ提言し勧告している[1]。繰り返して言えば，ショーの評価が生まれてくる所以であろう。

では，こうしたリンズィの経済改良のための提言が打ち出されて来た根拠，すなわち，「近代的」経済社会における生産力の展開を把握する彼の概念構成や論理展開をどのように評価すべきであろうか。まず第一に，スコットランド啓蒙の「年下の」世代の主要人物たちの近代経済社会・「商業社会」・「文明社会」・「市民社会」把握のそれと比較すると，両者の間の断絶が際だってくる。すなわち，リンズィの場合には，「近代的」経済社会の根幹に「インダストリィ」が据えられているとはいえ，この「インダストリィ」の歴史的内容そのものは，最終的には外国市場との関連で規定されることになり，この関連にこそ第一義的な意味が持たされている。要するに彼にあっては，国内市場の持つ意義が概念構成や論理展開のうえで極めて軽視されている。国内の（特に「ステイプル商品」の）生産・産業は直接に外国市場と結び付けられて両者の連関のみが重視され，国内の生産・「インダストリィ」の展開が国内市場を押し広げ，これがまた，「インダストリィ」の一層の展開のための重要な条件になっていくことが看過されている。「インダストリィ」の展開と国内市場との関係がまず据えられ，これを前提にして外国貿易・海外市場を把捉するという視点が欠落している。おそらく，リネン産業を国民的産業として強く高唱しようとするリンズィの意図が，かえって彼の視野を狭めてしまったのかも知れない[2]。あるいは，特にイングランドと比べて当時のスコットランド経済社会が後れていた事実が彼の思考のうえにも投影されているのかも知れない。何れにしても，リンズィの「インダスト

20) *The interest of Scotland consider'd*, pp. 143-4.

1) Cf. *The interest of Scotland consider'd*, pp. 169-70.

2) もともとリンズィには，国内消費向けの産業はもはや過剰になっているという現状認定がある。「石工，大工および船大工，スレイト工，仕立屋，庭師等々のような，その国に絶えず居住する人たちによってのみ従事されうる国内消費向けの業種は，実際には，不足するはずはない。それなのに，このような業種はほとんど過剰なのである。だから，過剰が起きた時には，彼らは，外国へ移住するか，国内で餓死せざるをえない」(*The interest of Scotland consider'd*, p. 120)。

リィ」概念に盛りこまれた歴史的内容には「近代的」と評価しがたいものを認めざるをえない。この点で，スコットランド啓蒙の「年下の」世代の主要人物との差異が強調されるべきであろう。

しかしながら，こうしたリンズィの概念構成や論理展開をその内容において支え，これに組み込まれている個別的な論点・各要素に光を当ててみると，そこには幾つかの注目すべき概念や見地が照らし出され浮かび上がって来るように思われる。先ず，「活動的」存在としての人間規定がなされ，これが，人間の「インダストリィ」と「労働」の根源的で潜在的な根拠と捉えられている。「人間本性」の一つを「活動」に求め，「活動」と「インダストリィ」・「労働」とを関連させる捉え方が注目される。さらに，この関連の現実化の過程において人間と動物の区別や人間的「欲求」が介在してくるのである。そうして，「インダストリィ」＝「労働」は，社会的分業の姿をとり「近代的」経済社会の生産力機構の基礎に据えられる。リンズィにあっては，「相互援助」という，曖昧で調和性のみが強調された概念ではあるが，近代経済社会を把握するうえで極めて重要な観点である。しかも次には「インダストリィ」は富の再生産と絡めそのなかで位置づけられている。この視角から「インダストリィ」と「需要」（＝消費需要）との関連が取り上げられ，このことがまた，徹底化されているわけではないが，「奢侈」を消費需要として捉える志向を彼に採らせることにもなっている。他に，これも透徹してはいないが，近代社会は何よりも「法」により支配されるべき社会と規定する見地，近代経済社会の新しい「習慣と慣習」・近代的な人間的美徳の指摘，そして，これらを「インダストリィ」，広く言って，商品経済のもとでの経済活動と関連づけて捕捉する視点などが注意をひくし，「民兵問題」を暗に意識したような記述も見られる。

勿論，たとえこれらの諸論点・諸要素が散見され，それらがスコットランド啓蒙の主要人物たちの論述のなかに発見されるとしても，その意味内容には自づと差異が出てくるだろう。しかしながら，これらの近代経済社会・「商業社会」・「文明社会」・「市民社会」を把握し展望するうえで不可欠な個々の歴史的概念や見地が，個別的にではあるが，模索され発見され彫琢され仕上げられてきて，スコットランド啓蒙は初めてその「年下の」世代において開花しえたのではないだろうか。残された問題は多いが，もしそうだとするならば，リンズィの経済改良の提言の内容はスコットランド啓蒙の形成にとっても一定の歴史的・学説史的意義を認める必要がないであろうか。